

マイクロ波論文（大学発）特集の発行にあたって



マイクロ波論文（大学発）特集編集委員会

委員長 本城 和彦

経済のグローバル化に伴うここ10年の産業界の変化には凄まじいものがある。背景として部品・モジュール・装置・システムの国際標準化とデジタル化をベースにした、研究開発、設計、生産、販売の国際分業化が急激に進んでいる点を挙げることができる。これにより、コスト削減の波があらゆるところに及び、我が国においては恒常的なデフレ状態に陥っている。企業経営においては高収益部門へのシフトが進み、それに伴い低収益部門の縮小廃止などのリストラが進行している。自明であるが、企業の単年度会計において最も利益貢献の少ない部門は、研究部門である。

本会の総合全国大会の発表件数統計を見ると、2002年から2010年の8年間で企業からの論文発表は1344編から909編に減っており上述の変化がはっきり裏づけられている。本来このアクティビティの低下を埋めるミッションを有するはずの国研や独立行政法人研究所などからの研究発表もこの期間に152編から87編へと同様に減り続けている。他方、大学からの論文発表は1800編から1745編へとほとんど変化がなく、相対的に大学における研究開発の比重が増してきている。すなわち、大学・大学院・高専など高等教育機関は、将来を担う人材を育成するだけでなく、今日及び未来の研究開発も担うというミッションを負うようになってきている。このような傾向は、マイクロ波分野も同様に見られる。

本会和文論文誌では、2004年よりマイクロ波論文(大学発)特集が毎年C論文誌の12月号で企画され、今年で7回目となる。マイクロ波工学は、携帯電話、無線LAN、電子レンジなど民生分野だけでなくレーダ、リモートセンシング、電力伝送など宇宙・防衛・科学などの社会の基幹分野における基盤技術であり日進月歩の進展が見られている。今年のマイクロ波論文(大学発)特集は、マイクロ波技術を用いた電力の伝送に関する2編の招待論文をはじめとし、能動回路、アンテナ及び受動回路、計測、電磁界解析の分野にわたった12編の論文と、2編のショートノートから構成されており、幅広いマイクロ波工学の研究分野から厳選された研究成果を紹介している。今回の特集号を企画する上でベースとなっているのが、年10回開催されるマイクロ波研究会を主催するマイクロ波研究専門委員会の日ごろの地道な活動である。

最後に本特集の刊行にあたり、貴重な研究成果を投稿して頂いた方々、査読委員、編集委員、学会事務局の各位に心よりお礼申し上げます。

ほんじょう かずひこ
本城 和彦 (正員：フェロー) 1974電通大・電波通信卒。1976東工大大学院修士課程電子物理工学了。同年NEC中央研究所入社。1994同社超高速デバイス研究部長。2001電通大情報通信工学専攻教授。化合物半導体デバイス、マイクロ波回路の研究に従事。工博。1983及び1988IEEE MTT-S Microwave Prize受賞。1980本会学術奨励賞、1999本会エレクトロニクス賞各受賞。IEEE Fellow。

マイクロ波論文（大学発）特集編集委員会

- | | |
|-----|-------------------------|
| 委員長 | 本城 和彦 |
| 幹事 | 内田 浩光・真田 篤志 |
| 委員 | 石崎 俊雄・伊東 健治・上田 哲也・岡部 寛 |
| | 川端 和生・檜橋 祥一・平田 晃正・平野 拓一 |
| | 分島 彰男 |